# 令和 2 年度 連携研究スキームによる研究 (委託研究課題) 評価報告書

研	究	テー	· 7	名	農福連携の地域経済・社会、障害者の心体への効果に 関する研究
政策研連携研究課題名				通名	農福連携効果の学際的かつ定量的研究
研	究	実 施	期	間	令和2年度 ~令和4年度
研	究	総	括	者	東京都健康長寿医療センター研究所 自立促進と精神保健研究チーム 専門副部長 岡村 毅
研	究	0)	概	要	1)定量的な農福連携研究に取り組んできた幅広い領域の研究者がプラットフォームを形成することで、効果の把握方法の開発とブラッシュアップに取り組む、2)定量的研究を一層進め政策形成の基盤となるエビデンスを創出する、3)一層効果的な農福連携の取組方を解明する。このため、下の研究項目①~⑧を実施。  ① 農作業が精神機能(前頭前野賦活)に与える効果の検証精神・知的・発達の障がい者対象の脳血流測定に関する先行研究を調査して課題遂行時の障がい者の脳活動の特徴をまとめた。その知見をもとに、今年度は、測定用プロトコル作成まで行った。 ② 農作業が心体や生産性向上へ与える効果についての調査表開発・調査分析農福連携を行う農業者、福祉事業所を対象に「障がい者の健康改善や、農業者や福祉事業所の生産性向上には、どのような要因がどの程度影響するのか」を定量的に把握するための調査表を作成した。2月に全国の農業者、福祉事業所に調査票を配布。 ③ 農作業が身体機能に与える効果と生産性との関連の検証事前調査として、身体活動量調査および営農実態調査の対象事例(候補地)2事例を対象にヒアリング調査を行い、障がい者の作業内容の詳細と営農概況を把握した。 ④ 認知症の人への農作業の効果の定量的分析認知症高齢者を対象に稲作ケアプログラムの効果を介入群と参照群を設定して検証した結果、介入群では精神的健康が向上し、主観的な良い変化が示された。日本をはじめとする東アジアの主要な農業である稲作が、認知症ケアに適用可能であることがわかった。 ⑤ 医療現場における農福連携の定量的研究

研究を実施してきたK病院全体を「グリーンケアホスピタル」として再構築するために、執行部を巻き込んで1)多職種チームを結成し、2)フィールドを整備し、3)スタッフを一体とするために院内アンケートによりニーズ把握を行い、新年度の準備が整った。

⑥ 都市等における農業を用いた地域づくり研究

大規模団地の住民およびNPO法人、区社会福祉協議会、区ボランティアセンター、区高齢福祉担当部署とチームを結成した。区ボランティアセンターをフィールドとし、具合的な準備に取り掛かった。

⑦ 「8050問題」に対する農を用いた支援プログラムの開発 今年度は文献整理とフィールド開拓を実施した。学術研究は極め て乏しいことが示された。「農」を用いた支援は中高年のひきこも り当事者のみならず、高齢である親の相談や居場所の確保を含む、 一元化した展開が有用であることが示唆された。

® 社会的に孤立している人に対する農を用いた支援制度の現状と 課題の把握

農福連携の主要な場となる一時預かり型サービスは、対象領域毎に独自の展開が行われてきた。文献の動向からは、地域福祉の主流化と共生型社会の政策推進によって、領域横断的なサービスが展開されつつあるが、呼称の違いに代表される各サービスと農業を融合するには理念の整理が必要となることが示唆された。

評 価 結 果

【評価項目ごとの評価】() 内は3名の委員の投票数を示す。

## ○評価委員会名及び開催日

連携研究スキームによる研究 研究テーマ「農福連携の地域経済・社会、障害者の心体への効果に関する研究」外部評価委員会

令和3年3月書面審査

#### 〇 評価委員名

安藤 光義 委員 (東京大学大学院農学生命科 学研究科・教授)

川手 督也 委員

(日本大学生物資源科学部·教 授)

茂野 隆一 委員 (筑波大学生命環境系・教授)

## 〇評価基準

・社会的ニーズへの対応

○社会的ニーズへの対応

S: 非常に大きな意義がある(2)

A:大きな意義がある(1)

○政策研究と連携して研究することによる政策研究への示唆の評 価

S: 非常に多くの示唆が見込める(1)

A: 多くの示唆が見込める (2)

○学術面からみた研究成果の評価

A: 学術的に高く評価できる(1)

B:学術的に評価できる(2)

○研究計画の妥当性

A: 妥当である(3)

○研究資源・実施体制の妥当性

A:妥当である(2)

S: 非常に大きな意義があ ろ

A:大きな意義がある

B: 意義がある

C:意義が小さい

D: 意義は見出しがたい

・政策研究と連携して研 究する(した)ことによ る政策研究への示唆の評

S: 非常に大きな貢献が見 込める

A:大きな貢献が見込める

B:貢献が見込める

C:貢献は小さい

D:貢献は見込みがたい

・学術面からみた研究成 果の評価

S:学術的に非常に高く評 価できる

A: 学術的に高く評価でき

B:学術的に評価できる

11

D:学術的な評価は低い

・研究計画の妥当性

S:非常に良い

A:妥当である

B:概ね妥当である

C:やや妥当でない

D:妥当ではない

・ 研 究 資 源 ・ 実 施 体 制 の 妥当性

S:非常に良い

A:妥当である

B:概ね妥当である

C:やや妥当でない

D:妥当ではない

B: 概ね妥当である(1)

○研究目標の達成度(達成可能性)

A:達成度は高い(1)

B: 概ね達成している(2)

【総合評価】()内は3名の委員の投票数を示す。

1:順調に進行しており、問題はない(3)

### 【評価委員からの主な意見】

- ○農業が身体・精神に与える影響が具体的な数字として 明らかになることに期待がかかる。
- ○農林水産政策研究所の関連研究との連携を強化し、そ の研究蓄積を生かすという観点から、一部の研究課題 で構わないので、過去の調査研究対象地での実証研究 が実現するとよいかもしれない。
- ○農福連携の意義を科学的、客観的に裏付ける研究とし て大きな社会的ニーズを有する研究だと考える。実験 を実施する課題についてはコントロール群の選定等が 困難であることが予想されるが、無理をせずに現実的 な対処を行っている点は理解できる。認知症ケアに職 歴・生活史が重要であるという指摘は大いに共感でき る。完成年度に向け、本研究の成果を現場でどの様に 活用していくべきかについて研究者サイドでも議論を 進めて欲しい。
- C: 学術的な評価はやや低 | ○当該の課題は、社会的にみて重要であり、政策研究的 にみてもその基礎となる医学的エビデンスにつながる ものであり、成果についてはきわめて期待が大きい。 本年度は初年度目であり、何より新型コロナウイルス の悪影響を考え合わせると、研究の取り組みを可能な 限りで進めていると評価できる。

- ・研究目標の達成度 (達 成可能性)
- S:達成度は非常に高い
- A:達成度は高い
- B:概ね達成している
- C:達成度はやや低い
- D:達成度は低い
- 総合評価
- 1. 目標を上回った
- 2. 目標を達成した
- 3. 目標を下回った
- 4. 目標を大きく下回った

今後の対応方針

令和2年度は新型コロナウイルス感染症という予測不能の事態があったが、知恵を絞り協力して対応し、各項目はおおむね順調に推移した。第1年目の準備のステージが終わり、いよいよデータ収集や解析の段階に向かう。評価委員のご意見を拝聴すると、量的評価への期待が大きいことを改めて認識した。農業が身体・精神にどのような影響を与えるかという客観データの収集に努めたい。

また、農林水産政策研究所の関連研究との連携が求められている。新型コロナウイルス感染症の影響を見極めつつ、農林水産政策研究所が実施する現地調査への参加、委託研究課題の研究フィールドに農林水産政策研究所の研究員を招くなどの交流を実施したい。農林水産政策研究所はわが国の農福連携活動全体を俯瞰する立場にあり、その支援があれば、より多くのデータが得られるかもしれない。何らかの実証研究ができないかを探りたい。さらに、令和2年度に医療機関を舞台にした研究でエビデンスを出しているが、少しでも興味を持った現場のスタッフが実践に使えるようなマニュアルがあれば社会実装に近づくであろう。マニュアルも作成を予定する。

最後に、農福連携という学際的な領域を開拓する我々のチームにとって、高い評価を頂いたことで非常に勇気を頂いた。現在の農学や福祉学や医学の領域ではまだまだ完全に理解されていないかもしれないが、少しずつエビデンスを発信し、人々の認識を変え、ケアを変え、100年後の世界から見て高く評価される研究を進めていきたい。